



古今系序
土佐日記



古今序考 上之巻



和漢の字を以て心とを辨す

凡そ人の心は物より生ずる事多し... 和漢の字を以て心とを辨す... 凡そ人の心は物より生ずる事多し... 和漢の字を以て心とを辨す...

○考ふるに... 既而... 和漢の字を以て心とを辨す... 凡そ人の心は物より生ずる事多し... 和漢の字を以て心とを辨す...

Handwritten blue ink characters, possibly a library or collection mark.

通降系麻屬廻ゆ奈陀摩は夜降多尔輔托和多羅須
何泥素企多迦避顧祚てく是長母始マテ素盛鳴此命のゆり
此命あぢさなまきいこのこる給ゆ加く天つ伊祖の神
いふあひてりつ危の由まもまてやい海あつり
さておまの由も降て柳田姫と湯書ししあつり住
りふ霧作りゆふしし夜多茂克伊る毛也霸俄伎荒麻
諸昧尔夜霜餓枳耶俱属踏廻夜霜俄伎廻とよみはく
始し正しの

ちとやふる神代より今の文字もさしすも寸たあふとて
事のんまきぶさうらへし人れ世となつてすをれをのここと
かろぞこそかあふりひしりいよみりる

これいさうらたれ神代の字もさしすも寸たあふとて
む三十一と云れ今のものより今もさしすも寸たあふとての二大
也神のほらさうらしと照作の字のよみなどとすすな
ほふしし人れ代となつては他人もさしすも寸たあふとて
よむを留たる神代より人のさしすも寸たあふとて
考らふ神代はさうらして人の代となつても古事記日本
紀の推古天皇神代のはらさうらのさしすも寸たあふとて

しとかなよの定めなきもさしすも寸たあふとて
七と云れ今もさしすも寸たあふとて
神代の字もさしすも寸たあふとて
と略てその事の手もさしすも寸たあふとて
しとかなよの定めなきもさしすも寸たあふとて
いひ且ほの字もさしすも寸たあふとて
くそのひふく思ひ解はつとて又今の文字もさしすも寸たあふとて
ちひとことさうらとて
こそさしすも寸たあふとて

人れ世となつてさしすも寸たあふとて
とよみさしすも寸たあふとて
とてさしすも寸たあふとて
あつて此記古きお浪がしし此事の手の端のことと
考らふこれより短ちのさしすも寸たあふとて
いとねらうとてさしすも寸たあふとて
とてさしすも寸たあふとて
よみさしすも寸たあふとて
は上下照姫れをいひしとてさしすも寸たあふとて
くぬあしとてさしすも寸たあふとて
かくてを記をめぐりてさしすも寸たあふとて

或言山内奥に安積郡
山内山井ノ有テシテ
山井ハ自ら水邊ヲ名メシ
ル井ナシト云フ上ノ山トハ
ミ下ハ大君ヲ名メシト云フ
イラセズトイフノ事ナリ
今ハ誤リナリ

その一 此の文は...

上代... 此の文は... 此の文は... 此の文は...

その二 此の文は...

此の文は... 此の文は... 此の文は... 此の文は...

その三 此の文は...

上は... 此の文は... 此の文は... 此の文は...

此の文は... 此の文は... 此の文は... 此の文は...

タラシノテヲノツ
トナレバトトイフ

よりのぬし

この世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
あはる申すの心をわらわのあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
此の世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
わらわのあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
死の世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
迎まじりし思ひし

たよりのぬし
よりのぬし
よりのぬし

此の世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
わらわのあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
死の世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
迎まじりし思ひし

よりのぬし

この世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
わらわのあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
死の世はけよ其のあまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし
迎まじりし思ひし

あまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし

あまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし

よりのぬし

あまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし

あまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし

あまのまじりたるを尋ねしきまじりし思ひし

皇神を
いふに
久しき
有るは
青と
と思ひ
清く

此殿の事

此殿の事
ハカ
今
モ
ノ
ク

この
殿
の
事
を
考
へ
る
に
...

此殿の事
ハカ
今
モ
ノ
ク

考へ
る
に
...

集と云ふ事なりしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文
よしと云ふ事ありしを云ふ事ありし時序文

今れ世の中をよしみんぬらむと奉りしより
あしすぬと云ふ

今れ世の中をよしみんぬらむと奉りしより
あしすぬと云ふ

後世の本ニ死ラソフ
トアんの誤

古人の言ハシキナキルヨム
クサリトセリ既ニ人凡
クララ奉ライフカポトク死

心一を足るひてさうらうと云ふ事ありし
月乃おのりしを思はれと云ふ事ありし

山桐の米ト大トタニカニ
ヨリフジノ鳥トイヒ
モ見ナレトモ其ハヨリ
吹着モタエタルナレシ

右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ

或人日茶後に江に三三
此稿作りアラタラシ
フアトトモモ稿タエ
ニ母ワタモトナリハ

糖
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ
右の山桐の米ト大トタニカニヨリフジノ鳥トイヒモ見ナレトモ其ハヨリ吹着モタエタルナレシ

文德ノ御時ヨリ前
用ナシ

万葉考ニ人ハ四十
歳リテ七十ニ及ハテ身
五レシ人ト云フカモシテ
又カレト老タリシトイフ
トナラナシ後世イト
カレ人ト云フカモシテ
天皇ノ神祕元ヨリ天平
八年マデナラシ此後ホ
トナラテテト万葉考
記ニ委シ

眞字序ハ大津皇子詩賦
作リ五七シヨリテヤトロ
タリトモカレハガコトモ
イヨク盛ナリヒト万葉
ニ云フ万葉ヲ多ク見テ
オシヨリニイフ言ハ大津皇子
ノ弟モイトヨリヨコシ

三位以上ノ人國史モ
ハナシテ本ノ人ハ
史ニイテイテガ五位モ
イタラズ人ト其證ナド
万葉考ニイテハナシ
或人ノ万呂ヲ名ナ
ルナリトド皆他ノ
姓氏ニテ本朝臣ニ
アラヌガニコシガリ
ケリ

人ノイテ名言ヲラヤミ
ライヒワツセルハ辰古
ヲ

もしもしと終つてしまふ
もあぬ人成れど
さき津もともさき
考らん

いよ
山部の赤人
村本
麻呂

是カハ
皇朝
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂

後
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂
山部
赤人
麻呂
村本
麻呂

OTO

人万呂赤人
麻呂

人の前人在し時代
リ上ニ一リ

或は改元云云其元云々
三年ノ奇モアリ此云々
歴モアラズトイフイ下第
二十モトモニトシテ
オモイワクフ云々ノ集ッ
ヨクニシテトモモト
集トニシテリタレト明
ラカナルベシ

先づうらむせしむに和れはすても稀きしふふあよと
帯てこととるいよいよ和れすしいたやせれ百づれこと
れをいふをよもいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを

考りしとれぬぬ久ひやなやをててみりさうれゆ時
これらうらむのいのちやあやう世り十づぎはあむむ
りる古れ事をもあやもあやう人きうもむてかまうと
もあやう所れひかごをるわのぬ後の人のわらうく何ぞ
といふもあやうあやう世り十づぎはあむむ平味て
方向のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
在て万葉を撰りしとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
此後七十四年七月甲午の日に又万葉を撰りしとらぬ
いふとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あゆむとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
りて二十とらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
月日のあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
又らぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

今世をいふもいふもいふもいふもいふもいふも

ききききききききききききききききききききき

あよひはむとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
位いとあやうのあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
れあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
れあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
れあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
れあやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

その外におちるも世もあやうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

すもあよひはむとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
えとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
あやうとらぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

チラノヤカドノヤカ
入タルヲハ修リミン
下ニ云ベシ

コトコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト
ノコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト
ノコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト
ノコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト
ノコトコトコトコトコトコトコトコトコトコト

在亦此業手つてもあつてもいふこと...
 めの花れあなるてまひはすれり...

あつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...

ふじやれやまひていことむたくいふてふらぬまよあつてもいふこと...

あつてもいふこと...
 こころむたくいふこと...
 た世すむい...
 考る小女野原のあつてもいふこと...

凡そわやアハ...
 凡そわやアハ...
 凡そわやアハ...

あつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...

あつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...
 考る小女野原のあつてもいふこと...

凡そわやアハ...
 凡そわやアハ...
 凡そわやアハ...

或は三才のツギキ
 フヨシトスレハフヨカ
 ラスハ得ヌ所ナリト
 イト山甲ノ奇心
 アラス且賈ノ本ヨリ
 ツヨキア好サレハハツヨ
 ナノウラヲツヨカラヌト云
 ハアラテ真名序ニ説而
 無切ト書レトヒシカカ
 キアトアリサレト強カラス
 トコト右ノ説ニイフコト
 キコト意ト言ト相カハヌ
 コモカフ文ニナラフ短ク
 イトトラシトスレハハツヨ
 言メクアラサレハハツヨ
 序書三人ハ皇朝ノ古ハ
 シラテ流言ヲケテカキ
 多カレトコノ衣道雅ト格
 本ノ流言ヲハキテカキ
 モノチカミテカキ何ナ
 フノ對句ノ乱ハハヤラ文
 イハハナリ

小中小甲を河を運するやうなけりのすいしし

あて運るるも...
 小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...
 小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...

考ふる小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...
 小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...
 小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...

小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...
 小中小甲の...
 河を運るる...
 運るるも...

大友のあまを屋すわるこしし

大友のあまを屋すわるこしし

そのさぬて...
 大友の...
 屋を...
 大友の...
 屋を...

考ふる大友の...
 屋を運るる...
 運るるも...
 大友の...
 屋を運るる...
 運るるも...
 大友の...
 屋を運るる...
 運るるも...

あの判を一人のこゝろにこゝろに
大をもちりすてをゆゑ

これ外の人々も名ださぬ。世にありあつたもの
ひびきあつたりもや。いふは本のものごとく可なり
かまはざりとのこゝろにひてそのよめちらぬもの

考ふに世に多岐をひひろと書かうと一に本の本
ぬとあつた連もあつたとき足してその一と判を
かたがたあつたりとすすののまじりたるを
ささるひひろとあつたりとすすののまじりたる
あつたりとすすののまじりたる

考ふに世の中より手管毎の船屋より外より
よむるもの六人まで及びひひろとすすののまじりたる

かゝる今すつられた天の中を流し見すは此時
らこれゆりゆるをさるぬゆまゆゆお中むらう
この流や一ぬの介をえり建ひろよお知ん
のりあつても山の麓よりゆりゆりおと

すてあつたのまゆりことと見し見すは此時
のこをすてぬゆりゆりお中むらう
一ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
をさるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
十日大内記きの友がゆりゆりゆりゆりゆり
のかひのさるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

考ふに世の中より手管毎の船屋より外より
よむるもの六人まで及びひひろとすすののまじりたる
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

タビ々皇朝イノミ
ミラケルニイトガリ
テノテタキコトヲ
シカラシモノ意ヲ
ゴトキヲコノムカ
アルヌホドノコト

とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの
とていひてはしるもいふが昔もあつたのちかへして是れもいふもの

ぬぐひ時うつり書さりぬり
ぬぐひ時うつり書さりぬり
ぬぐひ時うつり書さりぬり

よもこの文のちこりや書物といふたえすれぬ
よもこの文のちこりや書物といふたえすれぬ
よもこの文のちこりや書物といふたえすれぬ

其の度さす一はもと此のちこり書くは
其の度さす一はもと此のちこり書くは
其の度さす一はもと此のちこり書くは

と書くはとくは
と書くはとくは
と書くはとくは

一はもと此のちこりや書物といふたえすれぬ
一はもと此のちこりや書物といふたえすれぬ
一はもと此のちこりや書物といふたえすれぬ

此て今といふはとくは
此て今といふはとくは
此て今といふはとくは

昔より世系の本とくは
昔より世系の本とくは
昔より世系の本とくは

とせすはつりては
とせすはつりては
とせすはつりては

考より文字はとくは
考より文字はとくは
考より文字はとくは

古今序考略

天保二...
福...
...
...

藤原宗計多理

きりあつちくよ （81）
うはべー （7）
ちりや （6）
にうろよん （5）
廿七日 （4）
ちた （3）
又 （2）
ふ （1）
ふ （0）

みやろと （81）
な （7）

あ （81）
あ （7）
あ （6）
あ （5）
あ （4）
あ （3）
あ （2）
あ （1）
あ （0）

あ （81）
あ （7）
あ （6）
あ （5）
あ （4）
あ （3）
あ （2）
あ （1）
あ （0）

いゝらささしゝすよとぞいひあはる

二日ちのふたてのちもたよむもゆるりし物さけねこ
せしめ

三日おちりあきりき風のちを志ばとをむ心
やあふんころもあし

四日風ふらばえいてうだまうつさけよまのあつて
まつれ季をやくにもあきて来る人になしむもえあ
らふいさげわぶさねもあもあ あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる あぎいくきま
あふし あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる まふさうら

五日かせはやまねをれ甲いよあふ人きまにぼる
ひあく

六日きのよのせし

七日にあらぬおあさあにありあはるあをいほ
あふどかひちうた浪のふあふかぞんかあはる
あひぶにかの野 あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる 流をふあふこふあふあふい
てふれあははめて川のあふもあふもあふをまあふび
つふにあひつげえおこせあふあふあふににたてき
あふ花 あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる ちささるりあふをあふせさるいあ
せしめ

あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる
あふれあふらあふら あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる ちささるりあふをあふせさるいあ
あふれあふらあふら あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる ちささるりあふをあふせさるいあ
あふれあふらあふら あまのそてあだよそあややくとすよそ中びもあしる ちささるりあふをあふせさるいあ

こみかびびつれものいひぬらん いまにうれれがきさふ
（狂下り所御林香氏之時民合喃而禮は） 腹而越てさか
ちてうぬごもいばふむむをちをふごをふふふふふふふふ
てまごをむふふつべしからてこれちひびにこそあなりけ
（中） けふよりごもせしきゝる人そのなまをぞやいまあひ
いんげんよよほむとあふふありてあふふふふふふふふ
いひてはうしつゝいひていひていひていひていひていひ

初めは

らふぢりうつあふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
まもあふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
おどろおどろおどろおどろおどろおどろおどろおどろおどろおどろ

はのいぬー又あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
（うらやま） 氏の子は一後世に存するに神をいふひて日を用ひてハギとて西土正善云ふにハギとて西土の女セシ、てあふふふふふふふふふふ
（おの） のわいなるひそいたふあふはねの返しせん
（あふふふふ） と云ぢりうきていとおうき事うらよこさんやい
よふのびくいはやくにわかともなまらうまらひて
たちぬらんをばすよあふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ぬらやあふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
いあふふがまていふこのあふふふふふふふふふふふふふふふ
ひてさくをいひていひ

いんくもさあるも袖の洞川みぎはのころそぬれま
さりもあふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

こゝに替人ぬおふぬを志しなごしあゝおふあれいゝも
あれたよりあはけやんとしておうれぬやま

八月をさるるありて松お竹とてあなありあふひ月

に海をさるるこふさるるあひひの呉れ山のをさるる

に山もあゝあんやふいをなんおほわはさるる

こゝまよあふーうは山さちらへておれもあゝあ

もよまてやまよこめをたのひいぞあゝあ人のあ

五なる

九月のあふあふあはあまね川にさるる凌にさるる

九日つめておふさるるあふあふのさるるあ

とてこぼいでさるるあふあふあれたあふあふのさるる

だちさふれさふあひはせべのゆきさあさるるあふあ

よりいであまあひ日さるるあふあふあひさるるあ

あふさあふあふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあ

忽把十娘手子而
別行三三三三
回既書教人教人
たつたつたつた

大川のはれさるる
あふあふあふあふ
あふあふあふあふ

あふあふあふあふ
あふあふあふあふ
あふあふあふあふ

あふあふあふあふ
あふあふあふあふ
あふあふあふあふ

いもあうーたうんがさうあもーんのかくしーの
松原をちさくそぎのぼくそげくくちせつり
ともあふだもてた路うちよせささごてつるさびか
ふあーうとささたあさごてあぬのよあもさ
みささたあぬれごたさびつるにちせささあ
あふぬるさやあぬるさささささささささささ
かくあるをさつこぎゆくまあさささささささ
うたささーひんごもさささささささささささ
心まさせりをのこもあささささささささささ
あてさささささささささささささささささ
ぞなうかくあさささささささささささささ

何もたもつてさあさささささささ

まのあさささささささささささささ
こあさささささささささささささ
さよこさささささささささささささ
さよもさささささささささささささ

あさささささささささささささ
てあさささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ
さささささささささささささ

十日よこの那波のすめにさすめぬ

凡そふんてをよけれと

十一日あつたよあねを切て室津を舟人みれ

安藝郡の和名抄三佐国安藝郡室津とあり

まぶ祓をそよみのあつたよもえんたる月をば

うやの祈

ぞよひんがにまば志を公かふあむごにみれよ

日影の影を公かふあむごにみれよ

ゆてまあひまいのるどもしひるよあめぬを

日影の影を公かふあむごにみれよ

し羽根とよこあよまぬるのきわはあの名を

穿てまわしよこあけまめをあめやうまむと

よまごをまめまめまめまめまめまめまめまめ

あゆまのまめまめまめまめまめまめまめまめ

ふりてまめまめまめまめまめまめまめまめ

宮あへもが那とぞいさなをこもをんぬもいさで

とく都もあめまめまめまめまめまめまめまめ

ねとまめまめまめまめまめまめまめまめ

らりれついでまめまめまめまめまめまめまめ

はのあまのまめまめまめまめまめまめまめ

まめまめまめまめまめまめまめまめまめまめ

たでぞかまめまめまめまめまめまめまめまめ

ほほまめまめまめまめまめまめまめまめ

まめまめまめまめまめまめまめまめまめまめ

まの甲にあひあひまめまめまめまめまめまめ

もれまめまめまめまめまめまめまめまめ

十二日あめまめまめまめまめまめまめまめ

昔ふんてをよけれと
凡そふんてをよけれと
凡そふんてをよけれと

今いふ半はあ長八年十月の今日に伴ひて

古今集のせい

まめまめまめまめまめまめまめまめ

まめまめまめまめまめまめまめまめ

まめまめまめまめまめまめまめまめ

まめまめまめまめまめまめまめまめ

浦の
ちりーはるる家味ふつきぬ

十三日阿つらまたにいっこのあふる志ばあつてやらぬ
をんまこれまのあみまをせんとしてあつれより
しきあまあつてり海をこやれ

せもこれ後そこわ海人もうないつれ海と
さいてあふるくとあむよめるさそ十日あまりなれ
ハハおか、海、あねよめりはめ日より、船ははくれま

めこくうきぬきたそれはいそね神におぢてといひ
てなふれあかたふことほふ海嵐此妻の胎能能
履をぞこふあむあふだをぎよあふてんせふふ

五雜俎小海鼠一名海男子其状如男子執持菜ニ
對也ト云又海中海錯疏云蝦菜一名淡菜狀以珠母一孔大り中啣サモ男東海夫人又或謂東海婦人即昔謂西施不潔ト云云
大いそりかろひてあひの月をこつとあまつとよしてゆ

十四日あつらまたいっこのあふる志ばあつてやらぬ
きみせちこれさじまのなつれだうまの時より後
よかぢとすのきぬはりきりたひよせになつれ
よねよりおちりねうはるあはありぬかちと
里又きひまそ来よりよけあむさかぢと里
くききあかぢ

十五日あつらまたいっこのあふる志ばあつてやらぬ
しそをるさふろどまぞふそ廿日あまりつぬるし
つる日あつれが人と海をちづめつぞあるあるあれと
らいのつる

たてばきさちなれをまいてあふ風と浪とハれも

ふざちるやあるんこちんはまきまねにるにあらとに
つうり

十日風あこやるねをなにおちしころに室津小
たが海は浪たぐしていりし御崎とよあを思はん
とのみなんちあを思ふことたやむくもあはれある
人は波のうつをそめてよあるこい

白氏文集上南国歌書と云ふに南は海

ちおしもおねかこぞとよまねおねさ浪の中はおねぞ
ちりけるをておよのりし日よりあままでよせりあまの里
いつつよちりよはな



以下全て
白紙

